

キンスに就いて原蟲學を學び我が谷津教授と同時に同大學より Ph. D を得たる篤學の士なり。

The History of Protozoology. By F. J. COLE 64 pages : 2 portraits. London : Hodder & Stoughton 1926 3s.

著者が倫敦大學に與へし二回の講演錄なり。原蟲發見の初めより SCHAUDINN の時代に及ぶ。先人の發見所說の正誤兩者を擧げて原蟲學歴史の實情を明示せり。例へばかの有名なる STEIN の誤れる *Acineta* 說を記し SCHAUDINN の事業の内、球蟲に關するもののみ氏の高名を後世に残すに足るものと切言せしが如し。原蟲不死説は著者によれば詩人 COLERIDGE の *Biographia Literaria* (1917) に説きしを以て最初とする云ふが餘り知られざる所なり。説述詳細なりと雖ども 45 p. に *Microsporidia* BALBIANI (1882) の省略せられたるを見る。索引のなきと近年に言及せざりしを遺憾とすと雖ども文獻には百四十一個の参考書の指摘せられたるものあり。BÜTSCHLI の原蟲學歴史の古くなれる時に當り此書の發行は原蟲學界の歡迎する所なり。
(工藤六三郎)

三崎臨海實驗所行幸啓の記

四月四日に行幸啓のある豫定であつたが三日の大雨後とて一日御延べになり五日と御決定になつた。

五日は絶好の採集日和。空は花曇り風一つないのに庭の櫻がハラハラと散る。澄宮様も御乗馬でお出になるとのお知らせがあつた。九時三十分、御用邸御出門の時間である。先着の服部博士と一しょに中村部長、谷津所長、大島氏が寄宿舎への分れ路まで御出迎へ申し上げる。十時二十分御着。部長の御先導で油壺を左に見下されながら實驗室へ進まれる。實驗室前では田原、藤田、小鹽氏、學生、大島氏令嬢、令息、及び所員一同お迎へする。熊吉、幸吉、重次郎それに吉井氏の海上採集組は早速モーターの音をひゞかせて出かける。御座所では部長、所長、今村教授、大島氏、知事の拜謁が終つて直ちに御衣服がへ、兩陛下、照宮様おそろひて新井の砂濱にお降りになる。海上からはるかに拜したてまつると、兩陛下には寄宿舎下の断崖に立たせられて今村教授がヒミズ貝の孔と地震の關係を御説明申し上げる。照宮様は 砂濱で貝殻などお拾ひの御様子である。やがて皇后陛下は 大島氏の御案内で照宮様と御一しょに油壺へ御引きかへしになる。聖上陛下は谷津所長御先導申し上げ、服部博士等と足袋はだしの御輕装で共に磯採集をせられたこととて多くの獲物をとられたと承はる。丁度舊の十五日であるから採集船生簀の中にあるコマチ、ガシカゼ、ムラサキウニ、バフンウニ、モミヂガヒ、タコノマクラ、スカシカシパン、マンデウボヤ、イソバナ、イボヤギ、チゴケ、アカチブサ、イソカイメン、フサナマコ、アメフラシ、ドラベラ等を一々御覽になる。諸磯灣へはいつてバラ濱の前のアザモの中を底曳きする。その中に皇后陛下は油壺の奥で、潮干狩を遊ばさる。兩陛下御一しょに 棧橋から御上陸、これより少し先御乗馬でお着きになつた澄宮様の御出迎へをお受けになり、かくて一時三十分 両陛下は更に油壺の濱へお下りになり、小網代の杉田氏經營の垂下式の牡蠣養殖の状況を御覽遊ばされ、大島氏御説明申し上ぐ。聖上陛下には、この間に 澄宮様は辨天岩屋をお探りになり、水族室の魚の群に興がられて、兩陛下よりお先きに御乗馬でお歸りになつた。三時、わずかの御休憩の後、兩陛下はおそろひて水族室にお成り兼て御用意申し上げたる アカウミガメ、シンチュウエビ、スマイカ、マイカ、シビレエビ、ヨコタエビ、トンビエビ、ガンギエビ、イタチウカ、タナゴ、メバル、

雑 報

フグ、ヤウジウオ、マハギ、マダヒ、イシダヒ、クロダヒ、イワシ、タチクラゲを熱心に御覽になる、續いて實驗室で次の如く御前講演一時間半に渡つて申し上ぐ。

- 1) 大島正満氏—珍奇なる魚類、三崎産カニ類
- 2) 同 一ウナギの雌雄
- 3) 藤田輔世氏—真珠に就いて
- 4) 中村清二氏—天然及び人工真珠の物理的鑑別
- 5) 谷津直秀氏—ウニの發生
- 6) 同 一相模灣深海海綿
- 7) 田原正人—ホンダリラの發生
- 8) 大島正満氏—シビレエビ
- 9) 中村清二氏—シビレエビの發電原理
- 10) 今村明恒氏—關東大震特に相模灣底の變化（海底模型及び標本樹圖使用）

かくて午後四時四十分、所員一同御奉送の中を御満足げに御會釋をたまはりつゝ御還幸啓になつた。

三崎臨海實驗所に大正天皇太后的行啓ありて 故飯島所長御案内し上げたるは 餘程以前のことであるが今上陛下は特に御採集の御目的を以て行幸あり、御駐輦實に六時間と云ふ事は、部長、所長、所員一同の光榮身にある所である。終りにこの數日たへず陰にあつて 御盡力下さつた事務の小鹽氏並びに小島茂一君に熱い感謝をさうげつゝ筆を擱く。

(昭和三年四月七日 吉井橋雄拜記)

臺北帝國大學理農學部生物學科の開設

昭和三年三月十七日の勅令を以て臺北に帝國大學の創設を見る事になつた、文政學部、理農學部より成る綜合大學である。

理農學部は四月三十日學生宣誓式を挙げ五月五日より開講して居る。

該學部は生物學、化學、農學、農藝化學の四學科より成り學生は生物學、化學、各五農學二十名農藝化學十名を定員とする。

目下開講中の生物學科の講義と擔任教授は動物學通論(平坂恭介)、植物系統學及生態學(工藤祐舜)地質學概論及礦物學(早坂一郎)生物化學(三宅捷)

尙擔任教授の歸朝を待ちて本年中に開講さるべきものは、

應用菌學(足立仁)昆蟲學(素木得一)。

生物學教室は目下建築を急いで居るが竣工を見るのは明年夏頃であらう。差當り附屬農林專門部(舊稱臺北高等農林學校)の校舎を使用しつゝある。

(平坂報)

學 會 記 事

五 月 例 會

十二日(土)午後二時より東大理學部人類學教室に於て本會例會を開催、次の講演あり、出席者三十六名。

一、米國ロブスターの生長に就て

附在米所感

寺 尾 新 君